

俳諧連歌における謡曲の文句取り (一)

黄色 瑞華

談林俳諧における謡曲の文句取りは、その独吟とともに特筆すべき方法と言ってさしつかえあるまい。そして、談林俳諧の盛行はそれをのぞいて考えることは出来ない。古歌・古物語を典拠とする貞門の方法が惰性的にくりかえされ、文学としての獨創性・新鮮みを失ないかけていた寛文(一六六一—一六七三)の初年、謡曲の詞章を取り入れ、しかも、それを独特な働き方をさせるといふ西山宗因の方法は、進取の気性に富む多くの若手俳諧師たちに迎えられ、同年中には全俳壇に広がった。

謡曲の詞章を俳諧に用いることは、必ずしも宗因の獨創というわけではなく、今榮藏氏は、「けれどもそれは極めて因循姑息なやり方であって、到底宗因の口質と同日に論じられる性質のものではなかった。たとえば、『何某が出し処やかくすらん／梅津の里は霞しかゝる』(『牛飼』貞徳自註)、『菜ばかりの汁をもてなす町くだり／ありはら寺へまいる

よりあひ』(『貞徳百韻』自註⁽¹⁾)において、前者は『老松』の「抑是は梅津の何某」、後者は『井筒』の「名ばかりは在原寺に基いてそれぞれ付物を案出した(自注による)ものであるが、その態度は他の古典故事から付物を求める場合と全く同じであって、特に謡曲によったという特色は見られないであろう。」⁽¹⁾と云う。

『貞徳誹諧記』(服部一貞編・寛文三年^{六三六}末板行か)⁽²⁾所収の「貞徳翁独吟百韻自註」にも、

露ほどもあやかり度は定家にて

(貞徳自註・略)

内親王とちぎるいく秋

式子内親王なり。

がある。謡曲『定家』に、

「これは式子内親王の御墓にて候。蔦葛をば定家葛と申し候。」^{ワキ}「あら面白や定家葛とは、如何やうなる謂はれにて候ぞ。」^{シテ}「式子内親王、初めは加茂の齋の宮にそなはり給ひ、程なく下り居させ給ひしに、定家の卿忍び^{おしの}忍びの御契り浅からず。その後式子内親王、程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて、この御墓に這ひ纏ひて、互ひの苦しみ、離れやらず……」

とある。前句の「露ほどもあやかり度は定家にて」の「あやかり度」その内容を、「定家の卿忍び忍びの御契り浅からず」を以て解したものである。今氏があげた「菜ばかりの」(前句)に「名ばかりは在原寺」の文句によって「ありよら寺へ」と付ける付筋は典型的な貞門の方法であるが、「あやかり度」内容を解してのこの付筋は談林のそれと容

易には区別しがたい。

さて、「貞徳翁独吟百韻自註」で、謡曲の詞章によるとみるべきものはこの一例にすぎないのだが、古歌・古物語・故事によるものは次のごとくである。

1 空にしられぬ雪ふるは月夜にて

貫之のうたを以て月の雪となす。

一の句二の句の句切にて誹諧になる也。

2 とりあへず天神殿は手向して

亭子院大和竜門のたきを御覧じに御幸の時、菅家「このたびはぬさもとりあへず」の尊詠あり。

3 しめじがはらのたつは座頭ぞ

清水の観音の御詠にて付るなり。

4 寺のかへさに呼やあみ引

難波寺なり。万葉に「大宮の内まできこゆ」と云歌もあれば海士のよび声に成べし。

5 待て居るしるしの杉も長月や

(前略) 是は六条の御息所の源氏とはうくて、御娘と親子のちぎりのふかきを恨み給ふ心なり。

6 鎌倉の海道遠きさめがいに

『太平記』にあり。北条殿よりも六波羅の没落先なり。

7 りんきいはねど身をなげんやと

(格気) 是は業平の河内通ひの比有常の娘の身をもなげ用意するかと云様成思やり也。

8 しばらるゝ大内山の月のもと

しばられたい者肢なさやうなり。椎は頼政がすがたにて付る也。

9 恒政は十六のころさかりなり

但馬守御室そだち也。四し十六と云こころ也。

10 文王の世や民にてもしらるらん

(前略) 文王民畔をゆづると云事、いまだ国の世にならぬ先也。加様に仁にて紂に勝給ふ也。

11 鬼なれどしたがへられて大江山

酒典童子と申古事。

12 露ほどもあやかり度は定家にて

定家は住吉明神示現あつて『明月記』をし(る)らせり。

1~4は古歌、5~7は物語、以下は故事による。

『貞徳誹諧記』には、貞徳の独吟のあと「西武独吟」「季吟独吟」「重頼独吟」「雪独吟」なども収めてあるが、このうち「西武独吟」にも「註」が施してある。これも見ておく。

「西武独吟」で、謡曲の詞章によるものは、

日に向ふ国の指図は何のため

(注略)

たづねとひよる月のかげ清

(景)
うたひの古事なり。

鹿のねんなふうちすましけり

(注略)

高砂や此うらおもてのり付て

高砂に歌あれば也。「秋萩の花さぎにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらむ」。

の二例にすぎない。しかるに、和歌を典拠とするものは一〇例(古今五・新古今二・拾遺一・金葉一・新拾遺一)、『源氏物語』二例、『枕草子』『徒然草』によるもの各一例である。

二

寛文四年(一六六四)六月刊の『蠅打』(犬井貞恕)に、「大坂宗因、宇治にて『里人の渡りさふらふか橋の霜』とせしを、謡をたゞちに取たるとして人々興じければ、扱はよき事じやと心得て、『生国は越前鱈で候ひキ』『小鮎なます首かき切て捨てんげり』などいひて、謡の本を至極の歌書とする人とみえたり。大にあさましき次第也。偏に醜婦眉をしはむる類也。』⁽⁴⁾とある。

里人の渡りさふらふか橋の霜

は、謡曲『景清』の、

トモ詞

いかに此あたりに里人のわたり候ふか。

ワキ詞
里人とは何の御用にて候ふぞ。

を、

生国は越前鱈で候ひキ

は、謡曲『実盛』の詞章、

又実盛クセが。錦の直垂を着る事私ならぬ望なり。(中略)実盛生国は。越前の者にて候ひしが。(後略)

小鮎なます首かき切て捨てんげり

も、『実盛』の末尾、

あつシテばれ。おのれは日本一の。剛の者と。ぐんでうずよとて。鞍の。前輪に押しつけて。首かき切つて。捨て、けり。

(6) を「たゞちに取たる」ものである。この三句、「里人の」は『境海草』、他の二句は『懐子』(ともに万治三年一六〇六刊)に入集している。

『境海草』には、京・江戸・大坂・堺などの俳人一〇八名（他に無名五・作者不知三〇）の六七七句（一幽＝宗因二七）が収めてあり、そのうち典拠を指摘できるものは一二〇句、それぞれの例数をあげれば、

古今集62 新古今集24 千載集4 伊勢物語4 拾遺集3 新勅撰集3 詞花集2 万葉集2 源氏物語2 徒然

草2 史記・唐詩選・実語教・日次記事・後撰集・金槐集・続後拾遺集・今鏡・熊野など1

となる。『古今集』にその典拠を求めることの出来る六二例の中には、「春日野はけふはな焼そ若草の妻もこもれり我もこもれり」「世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もと祈る人の子のため」など、『伊勢物語』にも見られるもの四例、又、『伊勢物語』の四例中一例は『続後拾遺集』にその典拠を求めることが出来る。なお、諺をふまえたものが九例ある。

『境海草』六七七句中、古典に典拠を求めることが出来るもの一二〇、そのうち『古今集』にその典拠を求めることの出来るものは六二句に及ぶ。だが、謡曲に典拠を求めることが出来るのは、

立（い）るで、寺やかつらの霜柱 正範

の一句のみである。これは謡曲『熊野』の、

清水寺クセの鐘の聲。祇園精舎をあらはし。諸行無常の声やらん。（中略）寺は桂の橋柱。立ち出でて峯の雲。花やあらぬ初桜の祇園林下河原。

の「寺は桂の橋柱」による。

又、『境海草』には「付句」八〇が付してあるが、ここでも、『新古今』によるもの七例、『古今』によるもの四例、『万葉』『狭衣』によるもの各一例は見えるが、謠曲の詞章によるものは皆無である。

三

寛文一三年(一六七三)刊の『生玉万句』(西鶴)の序に、

或問、何とて世の風俗なほほしを放れたる俳諧を好るゝや。答曰、世こそぞつて濁れり、我ひとり清り。何としてかその汁を啜り、其糟をなめんや。問曰、文盲にしてその切成がたし。答曰、六祖は一文不通にしてその伝を継、如何して其分わかちあらん、朝于夕聞あしたにゆふべにうたは、耳の底にかびはへて口に苔を生じ、いつきくも老のくりごと益なし。故に遠き伊勢国みもすそ川の流を三盃くんで酔のあまり、賤やつがれも狂句をはけば、世人阿蘭陀流などさみして、かの万句の数にもものぞかれぬ。されども生玉の御神前にて一流の万句催し、すきの輩ともがら出座、その数をしらず、十二日にしてこと早きはれり。指さして嘲る方の興行へ当る所にして、其功ならずと聞しは、予がひが耳にや。ともいへかくもゆへ、則座即の興を催し、髭おをとこをも和げるは此道なれば、数寄にはかる口の句作、そしらば誹れわんざくれ、雀の千こ多鶴の一声と、みづから筆を取てかくばかり。

とある。「伊勢国みもすそ川の流」、すなわち守武流の俳諧を標榜する宗因派の俳諧を「阿蘭陀流などさみして」、「万句の数にもものぞかれぬ」、という状況下でこの万句興行は催された。「数寄にはかる口の句作、そしらば誹れわんざくれ」、という強い語気には、一派の気鋭としての西鶴の姿勢が感じられる。

さて、本稿の目的通りに、『生玉万句』における謡曲の文句取りに目を向ける。刊本『生玉万句』は、万句各巻の第三までと、祝賀興行の百韻五三巻の発句が収めてあるだけだが、謡曲による作句ぶりは以下のようなものである。

- | | | |
|--------------------------------------|-----|-----------|
| 1 老松も雨や滝水若みどり | 西田 | 久任(第二の発句) |
| 2 馬に鞍尾上の桜咲にけり | | 悦春(第三・発) |
| 3 御免あれ赤地の錦の置頭巾 | | 均明(第九・発) |
| 4 時雨のあめに染るびん髭 | | 流水(第九・脇) |
| 5 或は諸天に千早ぶる雪 | 備中 | 正倫(第十・脇) |
| 6 麓にあたつて帰る雁 <small>かりがね</small> | 蘆谷 | 信元(十三・脇) |
| 7 大あくび風もうそ吹むら雨に | | 西也(十四・三) |
| 8 一葉や然れば船のせん万句 | | 南遅(十六・発) |
| 9 急候都にはやく月のくれ | | 林元(十七・発) |
| 10 なくや鶉人々悦び引鳥 <small>(も)</small> じや | 和気 | 元春(十八・発) |
| 11 拾貫目休む重荷に春見えて | 志水 | 遠舟(十九・三) |
| 12 北へ行や南方むねん雁のこゑ | 仁和寺 | 正察(二十二・発) |
| 13 玉椿八千世を籠し万句哉 | | 有年(二十三・発) |
| 14 観音同座いく玉の秋 | 多古 | 三治(二十七・脇) |
| 15 たまご酒やかへらん事をとし忌 <small>(忌)</small> | 渡辺 | 三友(三十・発) |
| 16 梅花折て頼朝もさす首 <small>かうべ</small> 哉 | | 未学(四十・発) |

- 17 蛙鳴声仏事をやなしぬらん 仁和寺 高家(四十三・三)
- 18 月のある夜は涼し学問 古筆 治平(四十四・脇)
- 19 人形も近年御領の月暮て 牧野 一得(四十六・三)
- 20 畳の色も青陽の春 井原 鶴永(五十二・脇)
- 21 花嫁や里まで送る折も有 安井 豊由(五十三・発)
- 22 古袷袖しろたへにとき分て 下山 心入(五十四・三)
- 23 御自慢の松はもとよりうたひにて 鞠 久栄(六十・三)
- 24 七度まで正に霞ぬ鍛冶屋にて 藤田 不琢(七十一・三)
- 25 子持筋尾花が袖や染ぬらん 行沢 貞清(八十七・三)
- 26 桙狩山を屏風にかこはれて 生田 末清(九十六・三)

以上、二六例を求めることが出来る。これを見やすいように、曲名と詞章の部分とをあげて一覧表とする。

1 『老松』

シテ 梅も色そひ。地 松とても。シテ 名こそ老木の若緑。

2 『鞍馬天狗』

地歌 花咲かば。告げんといひし山里の。く。使は来たり馬に鞍。鞍馬の山の雲珠桜。

3 『実盛』

クセ 又実盛か。錦の直垂を着る事私ならぬ望なり。(中略)此度北国に。罷り下りて候はゞ。定めて。討死仕るべく。

老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば。赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ。

4 『実盛』

シテ詞語 さても。篠原の合戦破れしかば。(中略)実盛常に申しは。六十余つて軍をせば。若殿原と争ひて。先をかけんも大人気なし。又老武者とて人々にあなづられんも口惜しかるべし。鬚鬚を墨に染め。若やぎ討死すべきよし。常々申し候ひしが。誠に染めて候。

5 『賀茂』

後シテ 我はこれ。王城を守る君臣の道。別雷わけいかづちの神なり。或は諸天善神となつて。虚空に飛行し。

6 『兼平』

ワキ さてく大宮の御在所橋殿とやらんも。あの坂本のうちにて候ふか。シテさん候籠に当つて。少し木深き影の見えて候ふこそ。大宮の御在所橋殿にて御入り候へ。

7 『老松』

ワキ・ツレ二人 歌待詠 嬉しきかなやいざさらば。く。此松蔭に旅居して。風も嘯く寅の時。神の告をも待ちて見んく。

8 『自然居士』

クセ 黄帝の臣下に。貨狄と云へる士卒あり。(中略)ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば。折ふし秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の一葉水に浮びしに。又蜘蛛といふ虫。(中略)汀に寄りし秋霧の。立ちくる蜘蛛の振舞実にもと思ひそめしよう。工みて舟を造れり。黄帝これを召されて烏江わうかうを漕ぎ渡りて蚩尤しいうも安も亡ぼし。御代を治め給ふ事。一万八千歳とかや。シテ然れば舟のせんの字を。公地に前すむと書きたり。さて又天子の御顔を竜顔と名づけ奉り。舟を一葉と。云ふ事此御宇より生まれり。

9 『融』

上歌
夕を重ね朝毎の。宿の名残も重なつて。都に早く。着きにけり都に早く着きにけり。急ぎ候ふ程に。これは早
都に着きて候。

10 『海士』

地の
かの海底に飛び入れば。空は一つに雲の波。(中略)宝珠を盗みとつて。逃げんとすれば。守護神おつかくかね
てたくみし事なれば。特ちたる剣を取り直し。乳の下をかき切り珠を押しこめ剣を捨て、ぞ伏したりける竜宮
の習に死人を忌めば。あたりに近づく悪竜なし。約束の縄をうごかせば。人々よろこび引きあげたりけり。珠
は知らずあま人は海上に浮び出でたり。

11 『山姥』

隔つる雲の身をかへ。仮に自性を變化して。(中略)邪正一如と見る時は。色即是空そのまゝに。仏法あれば。
世法あり煩惱あれば菩提あり。仏あれば衆生あり衆生あれば山姥もあり。柳は緑。花は紅の色々。さて人間に
遊ぶ事。ある時は山賤の。樵路にかよふ花の蔭。休む重荷の肩を貸し月もろともに山を出で。里まで送るをり
もあり。

12 『鉢木』

地の
敵大勢ありとても。く。一番に割つて入り思ふ敵と寄合ひ打合ひて死なん此身の。此儘ならば徒らに。飢に
疲れて死なん命。何ぼう無念の事さうぞ。

13 『三輪』

地の
五濁の塵に交はり。しばし心は足引の大和の国に年久しき夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。変らぬ色を頼
みけるに。

14 『熊野』

河原^{ロソギ地}おもてを過ぎゆけば。急ぐ心の程もなく。車大路や六波羅の。地蔵堂よと伏し拝む^{シテ}。観音も同座あり。
 闍提^{せんた}救世の。方便あらたにたらちねを守り給へや。

15 『桜川』

散^{地次第}ればぞ波も桜川。く。流るゝ花をすくはん。花の下に。帰らん事を忘れ水の^地。雪を受けたる。花の袖。

16 『高砂』

松根^{シテ}によつて腰をすれば^地。千年の翠。手に満てり^{シテ}。梅花を折つて頭にさせば^地。二月の雪衣に落つ。

17 『仏原』

仏^{地歌}の原の草木まで。く。皆成仏は疑はず。有難やをりからの。野もせにすだく。虫の音までも声仏事をやなしぬらん。山風も夜嵐も。声澄み渡る此原の草木も心。あるやらん草木も心あるやらん。

18 『融』

それは西岫^{シテ}に。入日のいまだ近ければ。其影に隠さるゝ。たとへば月の有る夜は星の薄きが如くなり。

19 『実盛』

又実盛^{クセ}が。錦の直垂を着る事私ならぬ望なり。(中略)実盛生国は。越前の者にて候ひしが。近年。御領に附けられて。武蔵の長井に居住仕り候ひき。

20 『鶴亀』

夫陽春の春になれば。四季の節会の事船。不老門にて日月の。光を夫子の叡覧にて。
シテ、サン真ノ来序

21 『山姥』

(11参照) 樵路にかよふ花の蔭。休む重荷の肩を貸し月もろともに山を出で。里まで送るをりもあり。

22

『杜若』

袖^地白妙の卯の花の雪の。杜若の。花も悟の。心開けて。すはや今こそ草木国土。すはや今こそ。草木国土。悉皆成仏の御法を得てこそ。失せにけれ。

23

『鉢木』

枝^地をため葉をすかして。かゝりあれと植ゑ置きし。そのかひ今は嵐吹く。松はもとより常磐にて。薪となるは梅桜。切りくべて今ぞ御垣守。衛士の焚く火はお為なりよくよりてあたり給へや。

24

『小鍛冶』

宗^{ワキ・ソツト}近勅に随つて。即ち壇にあがりつつ。不浄を隔つる七重の注連。

25

『東岸居士』

処^{ワキ}は名におふ洛陽の。眺もちかき白河の。波^{シテ}の鼓や風のさくら。うち^{ワキ}連れ行くや橋の上^{シテ}。男女の往来^{シテ}。貴賤上^{シテ}下の。袖^{シテ}を連ねて玉衣の。さいく沈み浮波の。さくら八撥打ち連れて。百千鳥。

26

『紅葉狩』

畏^{ワキ・ツレ}つて候。名を尋ねて候へば。やごとなき上臈の。幕^{ウチ}うちまはし屏風を立て。酒宴なかばと見えて候ふ程に。懇に尋ねて候へば。名をば申さず。只さる御方とばかり申し候。

四

『生玉万句』における謠曲の文句取りの大体は右のごとくである。

さて、宗因自身においてはどうかであつたか。『西山宗因千句』(刊記なし。ただし、阿誰軒の『俳諧書籍目録』には「寛文十

参季」とある(6)も見ておく。

1 小鞆(鼓)のなるは滝の水霞む日に

2 三井の鐘つく事などがめそ

△前句▽おごられにけり若やがれけり

3 鬢髭をりんと作りて錦きて

4 枝きりすかす笠松の陰

△前句▽先やすらひて腰かけの露

5 秋更る小野ゝ小町はいたはしや

6 あなめくになみだはらく

△前句▽旅からたびにたびく空

7 花は花柳は遊行柳にて

8 たゞ一念に春なれや春

9 とらはれて是非もなくく東迄

△前句▽女は氏はともかくもあれ

10 房崎の浦はるかなる末盤(繁)昌

11 寺をももたぬ僧にて候

△前句▽酒うる市のかりやにぎはし

12 此ほどは潯陽の江に有付て

(以上・第一)

(以上・第二)

△前句▽物ぐるひとや人は見るらん

13 面白さたまりやいたさぬ酔心

△前句▽小便しば／＼柴ぶきの前

14 顔淵の庵によつと立ながら

△前句▽あれて冷じ毗沙門の堂

15 谷風に鞍馬の花ははらりさん

16 あはれ身は一河のながれ立かすみ

△前句▽かの沢にちつくりと咲かきつばた

17 卑下まんをする野守也けり

△前句▽住吉のうらさびしげなる大あくび

18 長ものがたり西の海まで

19 廿余年は夢のうき橋

20 おもひうちにあれば汗に出けり

21 あたら此世は夢の間の月

22 花見には爰を去こと遠からず

23 すぐなる道をおこしあめ箱

△前句▽御位牌に向ひてぬらす尼衣

24 行平みやこにいくほどもなし

△前句▽瀟湘のよるの床にも籠せて

(以上・第三)

(以上・第四)

25 雨もしつぼりのどかなる宿

△前句▽彦の山／＼くれ／＼の春

(以上・第五)

26 大天狗かすみの衣ぬぎ捨て

△前句▽住吉の松のいはれは長たらし

27 やれ出／＼高砂の舟

28 跡しら浪となりし幽霊

29 よしや吉野ゝ花も候べく

△前句▽ならのはのなにあふさらし耻さらし

30 又かまくらにわたされにけり

△前句▽月更る夜食過ての虫の声

(以上・第六)

31 露しん／＼とはなしする宿

32 しかまのかち路行出家落

(以上・第七)

33 酒になりたる菊の下かげ

34 ぞつとした山路の里に出来分限

35 炉路(廬地)入に柴の扉を押ひらき

36 大上戸そも／＼九代の後胤也

△前句▽西国がたよりのぼる恋風

37 前後一見せばやとそんじたり

△前句▽沓わたししてしづまりの音

(以上・第八)

38 飛びをりて又飛もどる橋の上^(お)

△前句√鼓が滝の高きなりおと

39 ざよんと絶ず問たり松の風

(以上・第九)

△前句√うかくと行かへるかよひ路

40 さりともと頼みくくて九十九夜

△前句√身にし「め」て恨を須磨の蟹のこと

41 おとどいながらちぎられにけり

(以上・第十)

これも、典拠を明らかにして、一覽表にしておく。

1 『翁』

翁
とうくたたりく^地ら。ちりやたたりたたりら。たたりあがりらうりとう。鳴るは滝の水。く日は照るとも。

2 『三井寺』

シテ
今宵の月に鐘撞く事。狂人とな厭ひ給ひそ或る詩に曰く。団々として海嬌を離れ。(後略)

3 『実盛』

シテ
さても。篠原の合戦破れしかば。(中略)実盛常に申しは。六十に余つて軍をせば。若殿原と争ひて。先をか
けんも大人気なし。又老武者とて人々にあなづられんも口惜かるべし。鬢髭を墨に染め。若やぎ討死すべきよ
し。(後略)

クセ
又実盛が。錦の直垂を着る事。私ならぬ望なり。(中略)老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば。赤地
の錦の直垂を下し賜はりぬ。

4

『善知鳥』

地歌 横障の。雲の隔か悲しやな。く。今まで見えし姫小松の。はかなや何処に。木隠笠ぞ津の国の。和田の笠松や箕面の滝津波も我が袖に。

5

『卒都婆小町』

シテ詞 あまりに苦しう候ふほどに。これなる朽木に腰を懸けて休まばやと思ひ候。ワキ詞 なるはや日の暮れて候道を急うずるにて候。や。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒都婆にて候。教化してのけうずるにて候。いかにこれなる乞こつがいじん丐人。おことの腰かけたるは。かたじけなくも仏体色相の卒都婆にて無きか。そこ立ちのきて余の所に休み候へ。

6

『通小町』

ワキ詞 (前略) 或る人市原野を通りしに。薄一村生ひたる蔭よりも。秋風の吹くにつけてもあなめあなめ。小野といはじ薄生ひけりとあり。これ小野の小町の歌なり。さては疑ふ所もなく唯今の女性は。小野の小町の幽霊と思ひ候ふ程に。かの市原野に行き。小野の跡を弔はぐやと思ひ候。

7

『山姥』

地 (前略) 邪正一如と見る時は。色即是空そのまゝに。仏法あれば世法あり煩惱あれば菩提あり。仏あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳は緑。花は紅の色々。(後略)

『遊行柳』

ワキ・ワキツレ二人・次第 帰るさ知らぬ旅衣。く。法に心や急ぐらん。ワキ詞 これは諸国遊行の聖にて候。(中略) 我一遍上人の教を受け。遊行の利益を六十余州に弘め。(後略)

8 『遊行柳』

御法の教なかりせば。非情無心の草木の。台に到る事あらじ。中々なりや一念十念。

9 『千手』

口惜しや我一谷にて如何にもなるべき身の生捕られ。今は東のはてまでも。かやうに面をさらすこと。(後略)

10 『海士』

房前の大臣とは我が事なり。さてもみづからが御母は。讃州志度の浦。房崎と申す所にて。むなしくなり給ひぬと。承りて候へば。

今の大匠淡海公の御妹は。(中略)二つの宝は京着し。明珠はこの沖にて竜宮へ取られしを。大臣御身をやつし此浦に下り給ひ。いやしきあま乙女と契をこめ。一人の御子を設く。いまの房前の大臣これなり。

11 『浮舟』

これは諸国一見の僧にて候。我此程は初瀬に候ひしが。これより都に上らばやと思ひ候。

12 『猩々』

これは唐土かね金山の麓。楊子の里に高風と申す民にて候。さても我親に孝あるにより。或夜不思議の夢を見る。楊子の市に出でて酒を売るならば。富貴の身となるべしと。(後略)盃の数は重なれども。面色は更にかはらず候ふ程に余りに不審に存じ。名を尋ねて候へば。海中に住む猩々とかや申し候ふ程に。今日潯陽の江に出でて。かの猩々を待たばやと存じ候。

13 『桜川』

なかくのこと花は今が盛にて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候ふが。美しきすくひ網を持ちて。桜川に流るゝ花をすくひ候ふが。けしからず面白う狂ひ候。(後略)

14 『半部』

ありし教ワキに従つて。五条あたりに来て見れば。げにも昔の座所。さながらやどりも夕顔の。瓢箪ヒョウタンしばく、空し。草顔クサガオ淵フチが巷カウチに滋し。

15 『鞍馬天狗』

かやうシテ詞に候ふ者は。鞍馬の奥僧正が谷に住居する客僧にて候。さても当山トウサンにおいて。花見ハナミの由うけたまはり及び候間。立越えよそながら梢サカをもながめばやと存じ候。

16 『錦木』

いかに御僧ツレ・出端。一樹一河の流を汲むも。他生の縁ぞと聞くものを。ましてや値遇チケウのあればこそ。(後略)

17 『野守』

さん候シテ是は此春日野の野守ノノリにて候。野守ノノリにてましまさば。これに由ありげなる水の候ふは名のある水にて候ふか。

18 『白楽天』

西シテ・ワキの海ウミ。憶おもひが原の波間なみより。現れ出でし住吉シテの神。住吉シテの神住吉シテの。現れ出でし住吉シテの。

19 『敦盛』

然るに平家クセ。世を取つて二十余年。誠に一昔の。過ぐるは夢の中なれや。寿永の秋の葉の。四方の嵐に誘はれ散々クセになる一葉の。(後略)

20 『籠太鼓』

げシテ・サンにや思おもうちにあれば、色いろはほかにぞ見みえつらん。つゝめども。袖そでにたまらぬ白玉しらたまは。人を見ぬ目の涙なみだかな。

21 『俊成忠度』

さゝ波や。志賀の都は荒れにしを。志賀の都は荒れにしを。(中略)げにや憂世は電光。胡蝶の夢の戯に。謡や舞へや津の国の。なにはの事も忠度なり。疑はせ給ふなわれ疑はせ給ふな。

22 『柏崎』

教はもとより弥陀如来の。御誓にてはましますや。(中略)声こそしるべ南無阿弥陀仏。頼もしや。頼もしや。積迦は遣り。弥陀は導く一筋に。こゝを去ること遠からず。是ぞ西方極楽の。(後略)

23 『逆鉾』

伊弉諾伊弉冊は。天祖の御教。すぐなる道をあらためんと。天の浮橋に。二神たゞみ給ひて。この御矛を改めて。天の逆矛と名づけそめ。(後略)

24 『松風』

(41参照)松風村雨召されしより。月にも馴るゝ須磨の海人の。塩焼衣。色替へて。練の衣の。空焼なり。かくて三年も過ぎ行くば。行平都にのぼりたまひ。幾程なくて世を早う。去り給ひぬと聞きしより。

25 『蟻通』

瀟湘の夜の雨しきりに降つて。遠寺の鐘の声も聞えず。(後略)

26 『鞍馬天狗』

後シテ・大應
そも／＼これは。鞍馬の奥僧正が谷に。年経て住める大天狗なり。まづ御供の天狗は。誰々ぞ筑紫には。彦山の豊前坊。

27

『高砂』

ワキ歌(三人)待謡

高砂や。此浦舟に帆をあげて。く。月もろともに出で汐の。波の淡路の鳥影や。遠く鳴尾の沖すぎてはや住の江に着きにけり。はや住の江に着きにけり。

28

『船弁慶』

後シテ・早笛

抑これは。桓武天皇九代の後胤。平の知盛。幽霊なり。その時義経少しもさわがず。打物抜き持ち。うつゝの人に。向ふが如く。(中略)ゆられ流れ。また引く汐に。ゆられながれて。跡白波とぞ。なりにける。

29

『江口』

地歌・一声

(前略)また宇治の橋姫も。訪はんともせぬ人を待つも。身の上とあはれなり。よしや吉野の。よしや吉野の花も雪も雲も波もあはれ世にあはぶや。

30

『千手』

地

定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りなば。とにもかくにも果てはせで。また鎌倉に渡さるゝ。(後略)

31

『井筒』

サン

さなきだに物の淋しき秋の夜の。人目まれなる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月も傾く軒端の草。(後略)

地歌

名ばかりは在原寺の跡旧りて。く。松も老いたる塚の草。これこそそれよ亡き跡の。一村すすきの穂に出づるはいつの名残なるらん。草茫々として露深々と古塚の。真なるかな古の。跡なつかしき景色かなく。

32

『賀茂』

播磨瀉。室のとぼその曙に。く。立つ旅衣色染むる飾磨の徒路行く舟も。上る雲居や久方の。月の都の山陰

の。賀茂の宮居に着きにけりく。

33・34 『俊寛』

時は重陽。所は山路。康頼・成経谷水シテくするの。彭祖が七百歳を経しも。心を汲みも得し深谷水。地歌飲むからに。げにも薬と菊水の。く。心の底も白衣の。ぬれてほす。山路の菊の露のまに。我も千年を。経る心地する。

35 『一角仙人』

柴の扉を推し開き。く。立出づる其姿。緑の髪も生ひ上る。牡鹿の角の。束の間も仙人を。今見る事ぞ不思議なる。

36 『船弁慶』

抑これは。桓武天皇九代の後胤。平の知盛。幽霊なり。(以下・28)

37 『知章』

詞これは西国方より出でたる僧にて候。われいまだ都を見ず候ふ程に。唯今思ひたち都一見と志し候。

38 『張良』

はいたる杓を馬上より。く。遙の川に落し給へば。張良つゞいて飛んで下り。流るゝ杓を。取らんとすれども所は下邳の。巖石いはほに。足もたまらず早き瀬の。矢を射る如く落ちくる水に。浮きぬ沈みぬ流るゝ杓を。取るべき様こそなかりけれ。

39 『翁』

千歳鳴るは滝の水。く。日は照るとも。絶えずとうたりありうとうとう。千歳絶えずとうたり常にとうたり。

40 『卒都婆小町』

地行きては帰り。かへりては行き、一夜二夜三夜四夜。七夜八夜九夜。豊の明の節会にも。逢はでぞ通ふ鶏の。時

をもちへず暁の。榻のはしがき百夜までと通ひて。九十九夜になりたり。

41 『松風』

此上は何をかさのみつゝむべき。これは過ぎつる夕暮に。あの松蔭の苔の下。亡き跡とはれ参らせつる。松風村雨二人の女の幽霊これまで来りたり。(中略)月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海人て女に。おとどひ選ばれ参らせつゝ。をりにふれたる名なれやとて。(以下24参照)

五

延宝三年(一六七五)四月刊、西山宗因判の十百韻『大坂独吟集』は、宗因傘下の大阪俳人の新風とその意気を宣揚せんとして編まれ、これは以後の俳壇、特に談林派の方向に大きく影響した。所収の十百韻は、中堀幾音・中林素玄・三昌(『生玉万句』に「浜野」氏とみえる)・意楽(『太夫桜』に「木尾」とあるという)・後の西鶴、井原鶴永(以上・下巻)、前川由平(百韻二巻)・渡辺未学・岡田悦春・伊勢村重安(以上・下巻)の独吟百韻である。なお、各句に対して宗因の引墨(判)があり、所々に評(判詞)がある。

例によって、謡曲に典故を求めることの出来る句々を拾ってみる。⁽⁷⁾

△前句▽蘇鉄まじりの浅茅生の宿

1 日覆も霜よりしもに朽果て

△前句▽臨終にうち向ひぬる西の空

2 そのき給へ人々いづれも

3 花をふんで勿体なしや御神木

4 山姥や月もろ共に出ぬらん

△前句▽巾着も大慈大悲の観世音

5 南をはるかに見る遠めがね

△前句▽ふるぐそく着てたてりとおもへば

6 ひかへたるかのやせ馬に針の跡

△前句▽判官のまなこさやかに月更て

7 すゝめ申せば寝酒何盃

◎静が酌おもひやられ候

△前句▽芭蕉はやぶれて肌着一枚

8 古寺のからうすをふむ庭の月

△前句▽恋の山また遁世のやま

9 やもめでは物の淋しき事ばかり

△前句▽一かせぎいのちのうちにと存候

10 江戸まで越ゆる佐夜の中山

△前句▽鯨桶を由井の汀に急ぎけり

11 ゆめちをいづる使者にや有らん

◎御盃すしを肴にこそ

△前句▽宿はづれにてはらすむら雨

(以上・幾音)

12 旅の空日はまだ残るつかひ銭

13 薄鍋を亡者は泣々見送て

◎さては彼獵師も一つ「に」成候哉

14 秋の海浅瀬は西に有と申

◎新しき通路にて候

△前句√みめよくはおどろかれぬる松浦人

15 たがしのびてかはらむ佐与姫

◎左手彦留守の間しれまじく候

△前句√喧嘩におよぶ尼崎うら

16 焼亡の煙をかづく壁隣

◎かづく妙の一字に候

17 月くらく三井寺さして落たまふ

◎作例も不存、此はじめて承驚入候

18 むかしにかへる妻をよぶ秋

19 かしらは猿足手は人よ壬生念仏

20 扱火をともし花の最中

△前句√肩さきや裾重に結ぶ露分て

21 矢つぼ慥たしかになく鹿の声

22 かづらぎの神はあがらせ給ひけり

(以上・素玄)

23 茶の水に釣瓶の縄をくりかへし

△前句▽入日こぼるる鼻紙のうへ

24 さし出す楊枝にかゝる淡路島

△前句▽塩屋の一家花野の遊舞

25 夕露は浦辺におゐて(い)隠なし

26 客僧は北陸道に拾二人

27 きのふも三度発るものゝけ

△前句▽高砂や尾上につゞく親類に

28 かしこはすみのえ状のとりやり

◎かしこはすみのえ耳なれ候へども、いつも面白く候

△前句▽浪間かき分けおよぐ海人

29 破損舟実げにそれより十三艘

30 橋がゝり今をはじめの旅ごろも

◎下手にはあらで句体は春藤・高安に見え候

△前句▽仕きせの羽織のこる松風

31 今朝見れば霜月切の質の札

32 其外悪魚鰐のかるくち

◎観世が音曲聞心ちし候

33 火々出見の尊も腹をかゝへられ

(以上・意案)

(以上・鶴永)

- ④神代のかる口もこれにはよもや
- 34 つなぬきの革を律やとぢぬらん
④扱もよき細工にて候
- 35 下樋の水をはこぶ六尺
- 36 あしにまかせてかのが行末
- 37 てゝめにはかくせ嵯峨野ゝかた折戸
△前句▽ふところへつつと押込松のかぜ
- 38 かたみのあふぎこなたはわすれず
④行手のゑみがほ思やられ候
△前句▽約束でゆけば極楽はるか也
- 39 釈迦はやりてと夕暮の空
△前句▽露のしのはらたてうとふせうと
- 40 鐘持は花の安宅の関越えて
△前句▽天竺震旦からかさの下
- 41 大きにもやはらげ来る飴はく
△前句▽はせよしの残らずめぐるむら雨に
- 42 ちりさふらふよ花の中宿
- 43 引立見ればひづむ天の戸
- 44 はれものゝうみすこし有須磨のうち

45 芋堀(掘)て見れば月こそ籬(さき)にあれ

◎風味すぐれて月と共に名物なるべし

△前句Vなき跡に残し(お)をかれし皮袋

46 三とせがほどのへちま也けり

◎だんぶくろもかく物にこそ

47 鷗とやいや／＼あれは夕ちどり

△前句Vくもりくるちりてれてんもはれよかし

48 親父が留守にしぐる松風

△前句V千万量へだつこゝろも不性から

49 たがひにかよふあしもあらはず

◎よごれあし、句におる(い)ては玉より明也

△前句Vいまは芭蕉葉にうん／＼と斗

50 置露の身は古寺の米をうち

◎六祖もきねをわたさるべく候

51 行てはかへりかへり手形に

△前句Vそのきつさきで天狗とはよも

52 むなぐらをとられて行しやんま山

◎花月があり様白なる天狗たるべく候

53 一類その以下霞にくるり

54 はり上て武略さまぐうたひそめ

⊙観世が一曲、年頭之御祝義万歳楽に納候

55 万歳楽は関東までも

(以上・由平第二)

56 釣針とうたがふ三ヶの月入て

57 又雲上の風ぞおどろく

△前句▽塵つもりてや鼻と成らん

58 中天狗みるやくとみねにかけり

59 尋ねて来ませ宗鑑が庵

60 油屋のしめ木の音をしるべにて

△前句▽やりませうから尻馬に月をのせて

61 うしともおもはぬ土佐坊が秋

△前句▽なだのしほやの紅粉かねの春

62 女方かすむ一夜の宿をかせ

△前句▽柴の庵つぶるゝほどの雨もりて

63 義朝殿のねぶとさびしき

⊙長田館にてねぶとのさはじめて承候。さびしき金言に候。

△前句▽樽肴詩につくつて見せぬらん

64 衣きぬ山の帯のいはひに

◎ 白天もにこくたるべく候

△前句Vむかしふ(う)疵とおもへば森の陰なれや

65 齋院の毛をふかせられ

△前句V生死のうみはたゞいまの事

66 やすくとねがひのまゝの花ざかり

◎ 浄土不退の花盛、愚老が望む所なれば

△前句V敷皮に狸は逃ておらばこそ

67 筆屋尋て行由井が浜

△前句V葦一再に秋の蟬

68 いづれの歌書の切ぞ身に入しむ

69 念仏の声もちる柳陰

70 足輕は野にふし山にとまり狩

71 蕨堀山(掘)高うして里遠し

△前句V水の月巴にめぐる湯口にて

72 つかふ長刀打直す秋

73 生るをば放つ手毎(なまぐ)は醒し

これも典拠を探つて、一覽出来るようにしておく。

(以上・未学)

(以上・悦春)

(以上・重安)

1 『定家』

^{クセ}あはれ知れ。霜より、霜に朽ち果てて、世々に旧りし山藍の。(後略)

^{シテ}誰とても。亡き身の果は浅茅生の霜に朽ちにし名ばかりは。残りても猶よしぞなき。

2 『忠度』

^地六弥太が郎等御後より立ちまはり。(中略)そのき給へ人々よ。西^ハ拜^マまんと宣ひて。光明遍照十方世界念仏衆

生撰取不捨と宣ひし。(後略)

3 『雲林院』

^詞や。さればこそ人の候。落花狼藉の人、そのき給へ。^{ワキ}それ花は乞ふも盗むも心有り。とても散るべき花な惜み

給ひそ。

4 『山姥』

^地隔つる雲の身をかへ。仮に自性を变化して。(中略)さて人間に遊ぶ事。ある時は山賤の。樵路にかよふ花の蔭。

休む重荷の肩を貸し月もろとも、に山を出で。里まで送るをりもあり。(後略)

5 『熊野』

^{シテ}南を遙に眺むれば。^地大悲擁護の薄霞。熊野権現の移ります御名も同じ今熊野。(後略)

6 『鉢木』

^{シテ}(前略)これは只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれたりとも此具足取って投げかけ。鏝たりとも長刀

を持ち。瘦せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ参じ着到に付き。さて合戦始まらば。

7 『船弁慶』

^地かく尊詠の偽なくは。やがて御代に出舟の。船子ども。はや^{ともうな}纜をとくくと。く。勧め申せば判官も。旅の

宿を出で給へば。

8 『井筒』

^地 我ながらなつかしや。亡婦魄靈の姿はしほめる花の。色なうて匂。残りて在原の寺の鐘もほのくくと。明くれ
ば古寺の松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり夢は破れ明けにけり。

9 『大原御幸』

^{官人詞} (前略) 先帝安德天皇の御菩提。ならびに二位殿の御跡御弔のために。大原の寂光院に浮世をいとひ御座候ふ
を。(後略)

^{シテ・サン} 山里はものゝさびしき事こそあれ。世の憂きよりは中々に。

10 『賀茂物狂』

^{クセ} 我も其。しでに涙ぞかゝりにき。(中略) 三河に渡す八橋の蜘蛛手に物を思ふ身は何処をそこと知らねども。岸
辺に波を掛川。小夜の中山なか／＼に。命の内は白雲の又越ゆべしと思ひきや。

11 『盛久』

^{シテ} 鐘も聞うる東雲に。^{ワキ} 牢より籠の輿に乗せ。^{シテ} 由比の汀に。^{ワキ} 急ぎけり。^{地次第} 夢路を出づる曙や。／＼。後の世の門出な
るらん。

12 『邯鄲』

^歌 一村雨の雨やどり。^地 一村雨の雨やどり。日はまだ残る中宿に。仮寝の夢を見るやと邯鄲の枕に臥しにけり邯鄲
の枕に臥しにけり。

13 『善知鳥』

^{シテ} 木の芽で萌ゆる遙々と客僧は奥へ下れば。亡者は泣く／＼見送りて行く方知らずなりにけり。行く方知らずな

りにけり。

14 『藤戸』

さても去年三月二十五日の夜に入りて。浦の男を一人近づけ。此海を馬にて渡すべき処やあると尋ねしに。彼の者申すやう。さん候河瀬の様なる所の候。月頭には東にあり。月の末には西にあると申す。(後略)

15 『江口』

川舟を。とめて逢瀬の波枕。く。浮世の夢を見習はしの。驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦瀉。かたしく袖の涙の唐土船の名残なり。(後略)

16 『雲林院』

松蔭に。煙をかづく尼が崎。く。暮れて見えたる漁火のあたりを問へば難波津に。咲くや木の花冬ごもり。(後略)

17 『頼政』

抑治承の夏の頃。よしなき御謀叛を勧め申し。名も高倉の宮の内。雲居のよそに有明の月の都を忍び出でて。憂き時しにも。近江路や。三井寺さして落ち給ふ。

18 『三井寺』

面白の鐘の音やな。我が故郷にては清見寺の鐘をこそ常に聞き馴れしに。是は又さど波や。三井の古寺鐘はあれど。昔に返る声は聞えず。誠や此鐘は季郷とやらんの竜宮より。取りて帰りし鐘なれば。(後略)

19 『鶴』

南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。(中略)さて火を燈しよく見れば。頭は猿尾は蛇。足手は虎の如くにて。鳴く声鶴に似たりけり。恐ろしななども。愚なる。形なりけり。

20 『熊坂』

ワキ
さてまた都のそのうちに。多き中にも誰がありしぞ。三条シテ詞の衛門壬生ワキの小猿。火ワキともしの上ワキ手分け切りには。
シテ
これらに上はよも越さじ。

21 『紅葉狩』

ワキ・ツレ上歌
大丈夫が。やたけ心の梓弓。く。いる野の薄露分けて。行くへも遠き山陰の。鹿垣の道のさかしきに。落ち
くる鹿の声すなり。風のゆくへも。心せよ風のゆくへも心せよ。

22 『右近』

地
治まる都の花盛。東南西北も音せぬ浪の。花も色添ふ北野の春の。(中略)枝に木伝ふ花鳥の。とぶさにかけり。
雲に伝ひ。遙に上る雲の羽風。遙に上るや雲の羽風に神は上らせ給ひけり。

23 『松垣』

シテ
松垣シテの女地の。身シテの果シテを。水掬ぶ。釣瓶シテの縄シテの。釣瓶シテの縄シテの。繰り返し。昔に帰れ白河の波。白河の波。白河の。

24 『弱法師』

ワカ
住吉ワカの。松の隙よりながむれば。日地落地かゝる淡路島山と。眺シテめしは月影地の。詠地めしは月影地の。今は入日地や落ち
かゝるらん。日想観なれば曇も波の。淡路絵島。須磨明石。紀の海までも。見えたり見えたり。満目青山は。
心地にあり。

25 『絃上』

シテ
さん候。塩屋シテの主シテにて候。是ワキに御座候ふは大政大臣師長公と申して。天下シテに隠シテれましまさぬ琵琶シテの御上手シテにて
候ふが。入唐シテの御望シテにて此浦シテに御下向シテにて候。一夜シテの御宿シテを参らせ候へ。

26 『安宅』

かやうワキ詞に候ふ者は。加賀の国富樫の何某にて候。扱も朝頼(頼朝)義経御不和にならせ給ふにより。判官殿十二人の作り山伏となつて。(後略)

何と山伏ワキ詞の御通あると申すか。心得である。なうく客僧達これは関にて候。承り候シテ。これは南都東大寺建立の為に。国々へ客僧をつかはされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。先勅に御入候へ。

27 『安宅』

委細承り候。それは作山伏をこれ留めよと仰せいだされ候ひつらめ。よも真の山伏を留めよとは仰せられ候ふまじ狂言。いや昨日も山伏三人迄切つたる上はシテ。さて其切つたる山伏は判官殿か。

28 『高砂』

よくく聞けばありがたや。今こそ不審はるの日の。先和らぐ西の海ワキの。かしこは住の江シテ。こゝは高砂。

29 『海士』

さては亡母の手跡かと。ひらきて見れば。魂黄壤くわうしやうに去つて一十三年。(中略)君孝行たらばわが冥闇をたすげよ。げにそれよりは十三年。

30 『高砂』

今を始の旅衣ワキ・ワキツレ二人・真の次第。く。日もゆく末ぞ久しき。

31 『松風』

松キリ地に吹き来る風も狂じて。須磨の高波はげしき夜すがら。(中略)関路の鳥も声々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや残るらん松風ばかりや残るらん。

32 『海土』

かの海底に飛び入れれば。空は一つに雲の波。(中略)かくて竜宮にいたりて宮中を見れば其高さ。三十丈の玉塔に。かの珠を籠めおき香花を供へ守護神は。八竜並み居たり其外悪魚鰐の口。遁れ難しや我が命。(後略)

33 『玉井』

それ天地ひらけ始まりしより。天神七代地神四代に至り。火々出見尊とは我事なり。(後略)

御心安く思し召せ。綿津見の宮主伴ひて。海中の乗物様々あり。大鰐に乘じはやてを吹かせ。陸地に送りつけ申さん。其程は待たせおはしませ。

34・35 『三輪』

秋寒き窓の内。く。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も苔に。聞えて静かなる此山住ぞ淋しき。

36・37 『百万』

(前略)かくて月日を送る身の。羊の歩隙の駒。足にまかせて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の寺に参りつ。四方の景色を眺むれば。

38 『松風』

実になう忘れてさむらふぞや。たとひ暫しは別るゝとも。待たば来んとの言の葉を。こなたは忘れず松風の立ち帰りこん御音信。

39 『柏崎』

頼もしや。頼もしや。積迦は遣り。弥陀は導く一筋に。こゝを去ること遠からず。是ぞ西方極楽の。上品上生の内陣にいざや参らん。

40 『安宅』

^{上歌} 気比の海。宮居久しき神垣や。(中略)末は三国の湊なる。芦の篠原波よせて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に
着きにけりく。

41 『白楽天』

^{シテ} 『白楽天』
それ天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を以て我朝の歌とす。されば三国を和らげ来るを以て。大きに
和ぐと書いて大和歌と読めり。しろし召されて候へども。翁が心を御覽せんため候ふな。

42 『熊野』

^{シテ詞} 『熊野』
なうく俄に村雨のして花の降り候ふは如何に。^{ワキ詞} げにく村雨の降り来つて花を散らし候よ。

43 『自然居士』

^{シテ} 『自然居士』
打たれて声の出でざるは。若し空しくやなりつらん。^{ワキ} 何しに空しくなるべきと。^{シテ} 引立て見れば。^{ワキ} 身には繩。^地 口
には綿の轡をはめ。泣けども声が出でばこそ。

44 『安宅』

^{クセ} 『安宅』
然るに義経。弓馬の家に生れ来て。(中略)ある時は山脊の。馬蹄も見えぬ雪の中に。海少しある夕波の立ちく
る音や須磨明石の。とかく三年の程もなく。敵を亡ぼし靡く世の。(後略) (以上・由平)

45 『松風』

^{シテ} 『松風』
灘の汐汲む憂き身ぞと人にや。誰も黄楊の櫛。^地 さしくる汐を汲み分けて。見れば月こそ桶にあれ。^{シテ} これにも月
の入りたるや。

46 『松風』

^{クドキ} 『松風』
(前略) さいても行平三年が程御つれくの御船あそび。月に心は須磨の浦夜汐を運ぶ海人乙女に。おとどひ選

ばれ参らせつゝ。(後略)

^{クセ}あはれ古を。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言三年はこゝに須磨の浦都へ上り給ひしが。此程の形見とて。御立烏帽子狩衣を。残し置き給へども。これを見る度に。(後略)

47 『隅田川』

^詞なう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ふぞ。^{ワキ}あれこそ沖の鷗候ふようたてやな浦にては千鳥とも云へ、鷗とも云へ。など此隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ。

48 『道明寺』

^{シテ・ツレ二人、真の一セイ}長月の。色も梢の秋を得て。照るや紅葉の土師の里。^{シテニノ句}なほ晴れ残る音とてや。^{一人}松風ひとりしぐるらん。

49 『高砂』

^{シレ}うたての仰候ふや。山川万里を隔つれども。たがひに通ふ心づかひの妹脊の山は遠からず。

50 『芭蕉』

^{クセ}(前略)身は古寺の軒の草。忍ぶとすれど古も。花は嵐の音にのみ。芭蕉葉の。もろくも落つる露の身は。置所なき虫の音の。蓬がもとの心の。秋とてもなどか変らん。

51 『卒都婆小町』

^地行きては帰り。かへりては行き、一夜二夜三夜四夜。七夜八夜九夜。(後略)

52 『花月』

^{シテ}扱もわれ筑紫彦山に登り。七つの年天狗に。とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ。

53 『景清』

^{上歌}(前略)は誰よりも御座船になくてかなふまじ。一類その以下武略さまぐに多けれど。名を取揖の船に乗せ。

主従隔なかりしは。(後略)

55 『盛久』

如何に盛久暫しとて。御簾を上げて召さるれば。せんかたもなき盛久が。命は千秋万歳の春を祝ふぞと。御盃を下さるれば。(中略)如何に盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊には乱舞堪能の由聞し召し及ばれたり。一年小松殿。北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於て。主馬の盛久一曲一奏の事。関東までもかくれなし。(後略)

56・57 『融』

青陽の春の初には。霞む夕の遠山。黛の色に三日月の。影を舟にも譬へたり。又水中の遊魚は。釣と疑ふ。雲上の飛鳴は。弓の影とも驚く。一輪も降らず。万水も昇らず。

58 『山姥』

冬はさえ行く時雨の雲の。雪をさそひて。山めぐり。めぐりく。輪廻を離れぬ。妄執の雲の。塵つもつて。山姥となれる。鬼女が有様。みるやくと。峯にかけり。谷に響きて今迄こゝに。(後略)

59・60 『三輪』

妾が住家は三輪の里。山本近き処なり。その上我が菴は。三輪の山本恋しくはとは詠みたれども。何しに我をば訪ひ給ふべき。なほも不審に思し召さば。訪ひ来ませ。杉立てる門をしるしにて。尋ね給へと言ひ捨て。かき消すごとく失せにけり。

61 『松風』

これにも月の入りたるや。うれしやこれも月あり。月は一つ。影は二つ満つ汐の夜の車に月を載せて。憂しともおもはぬ汐路かなや。

62 『松風』

塩屋ワキ詞の主の帰りて候。宿を借らばやと思ひ候。いかにこれなる塩屋の内へ案内申し候。
 これは諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ。暫く御待ち候へ。主にその由申し候ふべし。いかに申し候。旅人の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候。

63 『朝長』

さる程に嫡子惠源太義平は石山寺に籠りしを。クセ(中略)父義朝はこれよりも。野間の内海に落ちゆき長田を頼み給へども。頼む。木のもとに雨もりてやみくくと討たれ給ひぬ。(後略)

64 『白楽天』

いや其儀にてはなし。いでさらば目前の影色を詩に作つて聞かせう。青苔衣をおびて巖の肩にかゝり。白雲帯に似て山の腰をめぐる。心得たるか漁翁。シテ青苔とは青き苔の。巖の肩にかゝれるが衣に似たるとかや。白雲帯に似て山の腰をめぐる。おもしろしく。日本の歌もたゞこれさふらふよ。苔衣着たる巖はさもなくて。衣着ぬ山の帯をするかな。

65 『野宮』

われ此森の蔭に居て古を思ひ。心を澄ますをりふし。いとなまめける女性一人忽然と来り給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ詞いかなる者ぞと問はせ給ふ。そなたをこそ問ひ参らすべけれ。是は古斎宮に立たせ給ひし人の。仮に移ります野の宮なり。(後略)

66 『藤戸』

(前略)御法の御船に法を得て。即ち弘誓の。船に浮べば。水馴棹。さし引きて行く程に。生死の海を渡りて願のまゝに。やすくと。彼の岸に。いたりく。彼の岸にいたりく。成仏得脱の身となりぬ成仏の。

身とぞなりにける。

67 『盛久』

^{ワキ}さて由比の汀に着きしかば。座敷を定め敷皮しかせ。早々直らせ給ふべし。

68 『蟻通』

^{クセ}およそ思つて見れば歌の心すなほなるは。これ以て私なし。(中略)源流漸く繁る木の花のうちの鶯また秋の蟬の吟の声いづれか和歌の数ならぬ。(後略)

69 『隅田川』

^{男詞}なうあの向の柳の本に。人のおほく集まりて候ふは何事にて候ふぞ。^{ワキ}さん候あれは大念仏にて候。それにつきてあはれなる物語の候。(後略)

70 『卒都婆小町』

^{上歌}(前略)野に臥し、山に泊る、身のこれぞ誠の。栖なるこれぞ誠の栖なる。

71 『山姥』

^{シテ}殊に我が住む山家の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し。

72 『船弁慶』

^地又義経をも。海に沈めんと。夕浪に浮べる長刀執り直し。巴浪の紋あたりを払ひ。潮を蹴立て悪風を吹きかけ。眼もくらみ。(後略)

73 『放生川』

^{シテ}さればこそ放生会とは。生けるを放つ祭ぞかし。御覧候へ此魚は。生きたる魚をそのままにて。^{ツレ}放生川に放さん為なり。知らぬ事を宣ひそ。

このほかに、

判官殿の御返事の文

恋はたゞ僧正坊のふところに

⑨むつかしき懷牛若殿なればこそ

もあるが、これは『鞍鳥天狗』をふまえていることは確かなのだが、特にある部分のある語によつたと指摘することは出来ないで、右の数には入れなかった。

六

『生玉万句』で謡曲に典故を求めうるものは二六句、『宗因千句』では四一句、『大坂独吟集』では七三句。この数字によつて、俳諧の素材として謡曲の詞章がどれほど重宝されてきたかがわかる。

つぎに、この三種の俳諧集にその典故となった謡曲の曲名をあげ、数量的に整理してみる。

『生玉万句』 二〇種実

盛三例 老松・融・山姥・鉢木 各二例 賀茂・兼平・自然居士・海士・三輪・熊野・桜川・高砂・仏原・鶴亀・

杜若・小鍛冶・東岸居士・紅葉狩 各一例

『宗因千句』 三三種

翁・卒都婆小町・遊行柳・千手・鞍馬天狗・松風・船弁慶・俊寛 各二例 三井寺・実盛・善知鳥・通小町・山姥
海士・浮舟・狸々・桜川・半部・錦木・野守・白楽天・敦盛・籠太鼓・俊成忠度・柏崎・逆鋒・蟻通・高砂・江口
井筒・賀茂・俊寛・知章・張良 各一例

『大坂独吟集』 四五種

松風 六例 安宅 四例 山姥・盛久・三輪・高砂 三例 船弁慶・卒都婆小町・藤戸・白楽天・熊野・海士・雲
林院・隅田川 各二例 放生川・蟻通・野宮・朝長・融・景清・花月・芭蕉・導明寺・隅田川・自然居士・柏崎
百万・玉井・絃上・弱法師・桧垣・右近・紅葉狩・熊坂・鶴・三井寺・江口・頼政・善知鳥・邯鄲・賀茂物狂・大
原御幸・井筒・鉢木・忠度・定家 各一例

さらに、この三集を通してみると、七二種、用例の多いものは『松風』『山姥』の六、『高砂』の五、『船弁慶』『卒
都婆小町』『三輪』『海士』『安宅』の四、『盛久』『白楽天』『熊野』『三井寺』『鞍馬天狗』の三である。
又、能の種類別にこれを整理すれば、

協能物(初番目物) 九種

高砂 五 白楽天 四 老松・賀茂 二 他 各一

修羅物(二番目物) 七種

実盛 二 他 各一

鬘物(三番目物) 一六種

松風 六 三輪 四 熊野 三 江口・井筒・遊行柳 二 他 各一

雑物(四番目物) 二四種

卒都婆小町・安宅 四 盛久・三井寺 三 隅田川・蟻通・藤戸・自然居士・善知鳴・鉢木・桜川・柏崎 二
他 各一

切能物(五番目物) 一三種

山姥 六 船弁慶・海士 四 鞍馬天狗 三 融・紅葉狩 二 他 各一

なお、『古今集』『新古今集』、『伊勢物語』『源氏物語』などに典拠を求めうるものは、

『生玉万句』 一六種(三一例)

古今 七 新古今 五 伊勢物語 三 後拾遺・千載・平家物語 二 後撰・夫木・和漢朗詠・徒然草など各一

『宗因千句』 一七種(七一例)

古今 一九 新古今 一二 伊勢物語 一〇 後撰 五 拾遺 四 源氏物語・平家物語・和漢朗詠 各三 唐

詩選 二 後拾遺・風雅・古事記・徒然草など各一

『大坂独吟集』 二九種(九五例)

古今 二〇 伊勢物語 一五 新古今 八 拾遺 七 後拾遺・平家物語・徒然草 四 後撰・金葉・千載・源
氏物語 三 玉葉・和漢朗詠・論語 二 万葉・新勅撰・新統古今など各一

注

- 1 今栄蔵「談林俳諧史」(明治書院『俳句講座』1 俳諧史) 81 P
- 2・5・6・7 古典俳文学大系本による。
- 3 名著全集本による。以下、謡曲の本文はすべてこれによる。

付 4 前掲「談林俳諧史」を参照した。
この調査において、古典俳文学大系本の注に負うところが多い。学恩を謝し付記しておく。